

文学部教職課程

教授 今井 航  
講師 針塚 瑞樹

## 1 アンケートの実施目的

教育実習を終えた教職課程履修者に対して、平成29年12月1日（金）に1回目の事後の指導が行われた。その際、アンケートを実施した。本アンケートは、平成19年度から実施しており、今回で11回目となる。ただし、平成27年度の9回目のアンケート結果は、まとめることができていないため、この『教職への道』に未だ掲載されていない。

教育実習の内容はどうであったか。また、実習を終えてどのような変化があったか。今回も、彼らが自らのように評価しているのかを答えてもらった。

## 2 方法

当日は、51名の履修者が対象となった。アンケートの内容は、大きく分けて教育実習に関する評価と自己評価の2点であった。いずれも5段階評価を採用した。5段階は、以下のように設定した。

5 強く思う 4 そう思う 3 どちらともいえない 2 そう思わない 1 全く思わない

上記1から5までのうち、1つだけ該当する数字を選び、これに○印を付けてもらった。また、その他として主に公立学校教員採用選考試験に関する事項を調査した。さらに、教職課程への要望を自由に記述してもらった。以下の通りである。

### I. 教育実習に関する評価

①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。	5	4	3	2	1
②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。	5	4	3	2	1
③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。	5	4	3	2	1
④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。	5	4	3	2	1
⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。	5	4	3	2	1

### II. 自己評価

①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。	5	4	3	2	1
②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。	5	4	3	2	1
③大学卒業後は、教職関係(公/私立の臨時的任用教員、塾講師など)に就職したい。	5	4	3	2	1
④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。	5	4	3	2	1
⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。	5	4	3	2	1

### III. その他 (YesかNoのどちらかに○印を付けてください)

①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。	Yes	•	No
②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。	Yes	•	No
③今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていますか。	Yes	•	No
④あなたは、現時点で就職先が決まっていますか。	Yes	•	No

上記Ⅲ. ②でYesと回答された方は、受験した都道府県名、或いは都市名を下のカッコ内に全て記して下さい。  
( )

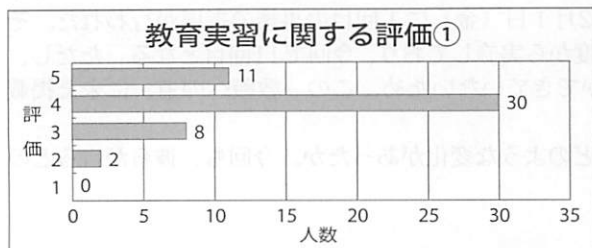
### IV. 教職課程への要望 (下の空欄に、実習の事前・事後の指導や講義・演習のことなど自由に書いてください)

### 3 アンケート結果

それでは、項目ごとに結果を見てみよう。

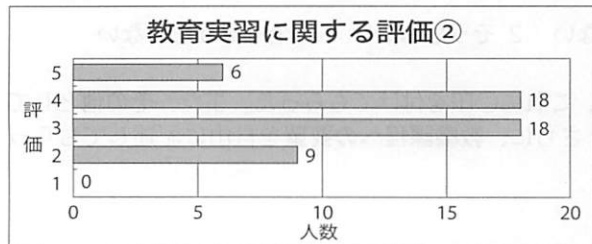
#### I. 教育実習に関する評価

①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。



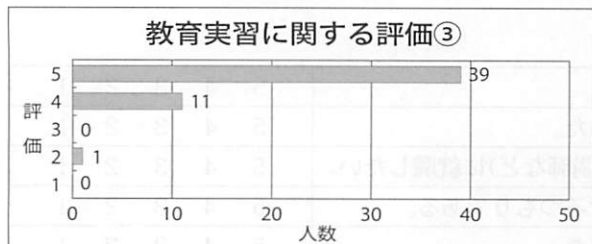
41名（80%）が十分に教材研究を行い、授業にのぞんだとしている。

②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。



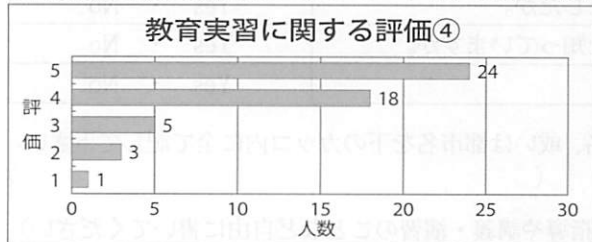
学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができたとする者は24名（47%）である反面、27名（53%）がどちらともいえない、あるいは思い通りにはいかなかったとしている。

③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。



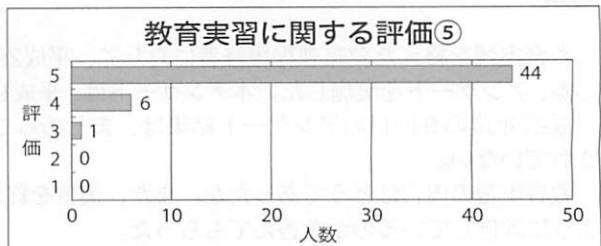
50名（98%）が熱意をもって、教育実習に取り組んだとしている。

④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。



42名（82%）が積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかったとしている。

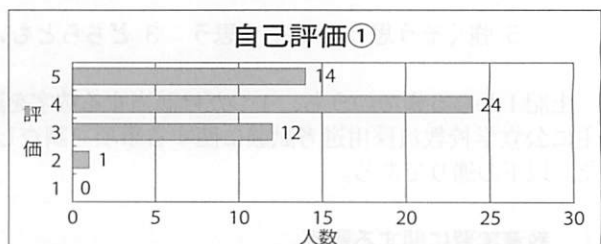
⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。



50名（98%）が遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守ったとしている。

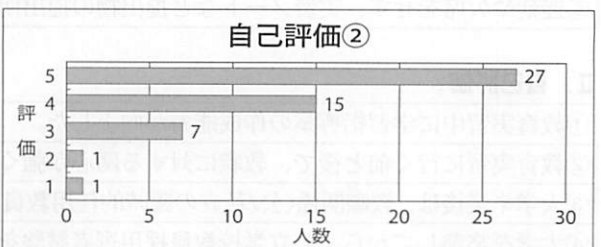
#### II. 自己評価

①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。



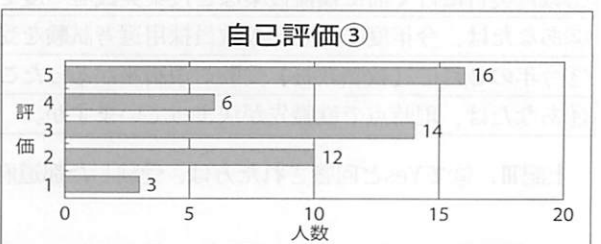
38名（75%）が教育実習中に学習指導案の作成能力が向上したとしている。

②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。



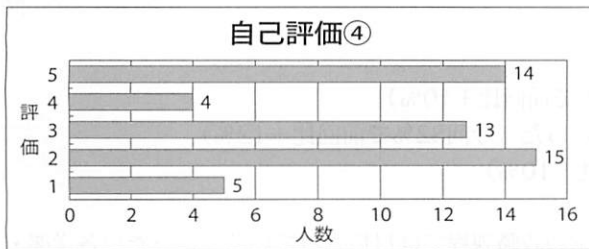
42名（82%）が教育実習に行き教職に対する関心が強くなったとしている。

③大学卒業後は、教職関係に就職したい。



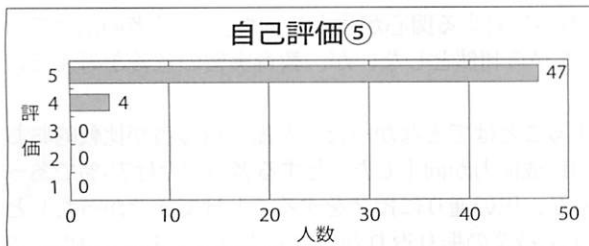
大学卒業後は、教職関係に就職したいとする者は、22名(43%)である。14名(27%)がどちらともいえないとしている。

④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。



大学を卒業してからも、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりの方は、18名(35%)である。

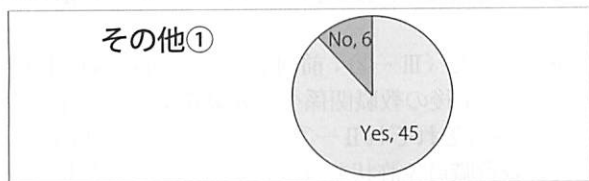
⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。



51名(100%)が教育実習はこれからの人生にとって貴重な体験となったとしている。

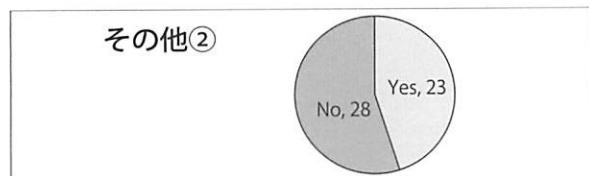
### Ⅲ. その他

①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。



授業実践を一度でも経験してから教育実習に行った者は、45名(88%)である。

②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。



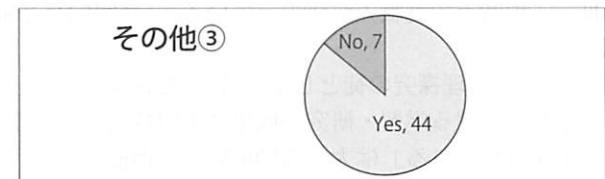
今年度の公立学校教員採用選考試験を受けた者は、23

名(45%)である。

また、受験先の内訳(延べ29)は、以下の通りである。

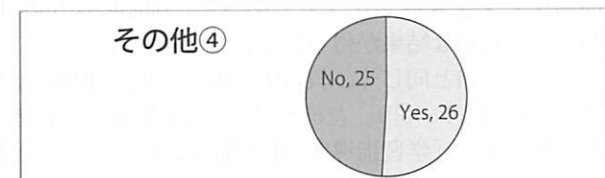
福岡県	福岡市	大分県	宮崎県	長崎県
1名	6名	11名	4名	2名
熊本県	熊本市	東京都	兵庫県	
1名	2名	1名	1名	

③今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていますか。



今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていた者は、44名(86%)である。

④あなたは、現時点で就職先が決まっていますか。



平成29年12月1日(金)の時点で就職先が決まっている者は、26名(51%)である。

### Ⅳ. 教職課程への要望

教育実習に臨む前に授業の練習を行っておくこと、あるいは「実習指導」・「教職実践演習」で行われている教育実習報告会の報告者人選の在り方や同じくパネルディスカッションの議論の仕方などに関する指摘が見られた。

報告者人選や議論のことは、とくに栄養教諭の免許状取得希望者からの指摘が多く見られ、報告者に当該希望者を入れてもらいたいとか、議論の内容に食に関する指導のことを含んでももらいたいとかの要望が目立った。前者の件は是非とも試みるつもりである。たほう、食に関する指導のことは、パネルディスカッションに要する時間にどうしても限りがあるため、できれば「学校栄養指導論」の時間を活用するなどして議論してもらいたい。

また、授業の練習の機会を設けてもらいたいという要望も見られた。課外活動により自主的にそうした機会を設けることで、友人知人や先輩後輩などの各関係を活かして練習したり意見を交換したりしてもらいたいと思うが、休止中の「模擬授業の会」を再開させることで、そうした機会を設定するための後押しをする必要を感じていないわけではない。

## 4 まとめ

冒頭でも述べたように、今回は本アンケートを実施し始めてから11回目となる。今回の結果は果たしてどうであったか。特徴を見るため、項目ごとに前回の結果と比べてみた。

前回に比べて肯定的な回答の割合が大なり小なり減少している。10ポイント以上のプラスが見られた点に着目すれば、以下の通りである。

- I—①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。(今回80%で前回比+10%)
- II—②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった(今回82%で前回比+12%)
- III—④現時点で就職先が決まっている。(今回51%で前回比+10%)

「学問的真理探究の徒としての教師」を養成することが本学の教職課程では目指されている。いったい各学部・各学科における学習・研究の成果は専門教科における学習支援と如何に結び付くのだろうか。「1を知っていれば1を教えられる」は大きな勘違い」と指摘されている(安河内哲也『できる人の教え方』(中経出版、2007年7月、20頁)。1を教えるために100に値するような教材研究に取り組みたい。たくさんの結び付きに気づくことができるように、専門分野で真理を探究し続けることである。「十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ」とする者の割合が前回比でプラス10ポイントであった。教育実習に臨む者は皆そうであったらいたい。

同様にプラスが示されたのは「教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった」とする者の割合で、前回比でプラス12ポイントであった。関心のなかみは残念ながら判然としないが、教育実習の意義を考えるにあたって有効な結果が得られていると思われる。

一方、従前と同じく、教育実習中に「思い通りに授業をすることはできなかった」と振り返る者が比較のおおく見られた(I—②)。たばうで「教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した」とする者の割合は75%であった(II—①)。「学習指導案の作成能力は向上したと思われるが、思い通りに授業をすることはできなかった」ということであろうか。作成能力が向上したがゆえに、よりよく授業の振り返りができるようになり、「現場」では決して思い通りに行うことができなかつたと真摯に捉えられているのであれば、ここには次の授業改善に繋がる可能性を見て取ることができよう。

「大学生」であるとは言え、学校現場にひとたび入ったら、生徒や保護者から見れば「教師」である。授業自体の質的な向上も目指していきたい。III—①で教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験したことがあると回答した者の割合は88%(前回比+4%)である。本学では、教職課程履修者全員が授業実践をしてから教育実習にのぞむことを強く勧めている。「教師」であることを自覚し、授業自体の質的な向上を目指し、皆が前もって授業実践に取り組んでもらいたい。

また、今年度の教員採用選考試験の受験者の割合は半分以下であった(III—②:前回43%、今回45%)。同時に、就職先が決まっている割合が高いせいか(上記III—④)、大学卒業後の教職関係への就職希望者、おなじく卒業後の教員採用選考試験の受験希望者の各割合も半分以下である(それぞれII—③:前回36%、今回43%、II—④:前回34%、今回35%)。教職関係に就かないとはいえ、教育職員免許状を取得しようとする者として教職課程履修者全員に受験を勧めたい。受験すれば、教員としての資質・能力を問うことができるし、よりいっそう自らの立ち位置と進むべき道が明らかになるだろう。

本学教職課程のどこに課題があるか。今後も真摯に問いながら、見つけた課題を1つ1つ解決していくつもりである。教職課程履修者とともに改善に努めながら、1人でも多くのよりよき教師を、この「別大」から輩出していきたい。